

金田一春彦先生のご著書に見られる偏見： 日本語教育ノート2・文化その4

江村，裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

2009-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007203>

金田一春彦先生のご著書に見られる偏見

—日本語教育ノート2・文化その4—

江村裕文
EMURA Hirofumi

1 金田一先生の業績

まず、ここで金田一あるいは金田一氏というように呼ばないで、金田一先生と書いた理由について書いておくべきであろう。それは、大学2年生当時、隔週で「日本語表現学」と題された講義をなさっていた金田一先生の警咳に接したたった二名の受講生の一人が筆者だったのである。直接お教えを受けた先生なので、先生と呼ぶのがふさわしいと考える。たしかアラビア語に関するレポートを提出し、きちんと単位をいただいたと記憶している。

金田一先生のご業績は、2003年11月から玉川大学出版部より、別巻を入れると全13巻の著作集として刊行されている^①。先生の場合、専門的な著作が多数あるのはもちろんであるが、その他に一般読者向けの新書や文庫本が多数ある。先生のご著書の中でもっとも広く読まれ、また読まれているのが、1957年（昭和32年）に岩波新書として出版された『日本語』およびその改訂版で1988年（昭和63年）に上下2巻として出版された『日本語新版』であろうと思う^②。

2 『日本語新版 上・下』

本稿では、おそらく国語学者として知られている金田一先生が、言語学者としてはあまりにも言語学的な発想に乏しく、いわばかなり文化論・文明論という点で偏見に満ちた発想の持ち主であることを指摘したい。内容としては、うえであげた上下2巻の『日本語新版』の中に見られる記述に反映されている偏見を指摘するという形をとりたい。『日本語新版』は、著作集の第四巻に所収されているが、引用は岩波新書版によった。

3 1988年版の『日本語新版』の記述

3.1 『日本語新版 上』

序章

金田一先生は、この著書の序章において、日本語が特異な言語であるという主張とごく平凡な言語であるという主張を紹介し、日本語だけがもっている性質は「文字の面で漢字・カタカナ・平かな・ローマ字・アラビア数字といった多くのちがった体系のものを使っている言語は、世界唯一のはずである。」⁽³⁾と述べていらっしゃる。残念ながら文字の問題は、もちろん言語と無関係ではないけれども、言語そのものの問題ではない。したがって、金田一先生の「なんとか日本語が特殊であってほしい」という希望は、ここで儂くついでることになる。

また、日本語が特殊なものであるという説を支持する議論として、角田説⁽⁴⁾を引用したのもまずかった。身につけた言語によって右脳と左脳の働き方が異なってくるという、一般には衝撃を与えた説であるけれども、「言語学者」でこの説を支持する人はまずあるまい。それに、「これによれば、日本語は、少なくとも普通に文化国家と言われている国の国語とはきわめてちがった特殊なものということにな

る。」という表現⁽⁵⁾にも、偏見が感じ取れる。言語の話をしているときに、「文化国家」としてどうかという話題を持ち出す、という発想自体が問題なのである。

I 世界のなかの日本語

「一 国語としての日本語」の最後に「日本人が外国語をしゃべれないのを未開のせいと考える必要はない。」とある⁽⁶⁾。これには明らかに、日本人は外国語がへたであるが、それは未開だからと考えるかもしれないが、という前提がある。だから、アメリカ人も一言語しか話せないし⁽⁷⁾、逆にナイロビに住む黒人たちは何言語も話す⁽⁸⁾という例をあげていらっしやるのである。つまりアメリカ人は未開ではないのに一言語しか話せないのに対し、アフリカ人は未開なのに何言語も話す。したがって日本語しか話せない日本人は未開ではない、という話をされているわけである。いくつ言語が話せるかどうかということと、その話者が未開かどうかということとはなんら関係がない、というのが言語学的な観点である。

「二 日本語の多様性」には「一般に、方言の違いが激しいというのは、どちらかと言うと文化のあまり高くない地域に多いようだ。」という記述がある⁽⁹⁾。そもそも言語の地域変種である「方言」の種類が多いかどうかということと、その言語が話されている地域の人々の文化が高いか低いということとは関係がないし、また文化が高いとか低いとかいう発想そのものが根本的に間違っている、というか言語学的ではない。だからこのすぐあとに、「日本語で方言のちがいが大きいのは、日本の社会が未開であるからか。」という的外れな設問を立てるといようなことをなさってしまうのである。これに関して、「東京の言葉を基礎として、これにさらに磨きをかけた言語を考え（ここでの意味は「創り出し」：筆者）、これを<標準語>として、学校教育で普及させた。（中略）日本語の<共通語>の普及は注目すべきも

のがあるようだ。」と続けていらっしやる⁽¹⁰⁾。日本では他の諸国に例のない「正しく美しい」モデルとしての日本語、それを<標準語>と呼ぶかく共通語>と呼ぶかは別として、を創り出し、それを学校教育を通じて全国に広めるということをや、かつそれに成功したと書いていらっしやるのである。ここには、中央集権的な権力によって、本来その人々の言語ではなかった変種を、国家の名において押し付けることがどういう意味を持つのか、といった視点は完璧に欠落している。このことは、先生のご尊父にあたる金田一京助氏が、アイヌは日本人になったほうが彼らにとって幸せであると考えて、「土人法」を支持されていたことを思い出させる。

また「日本語の変異の中で、文明人の間で特に珍しいと言われるのは男女の性別による言葉のちがいである。」という記述もある⁽¹¹⁾。さらに、「男女の言葉のちがいがあるのは、文明国の言語には例が少なく、(中略)主として未開民族国の言語に見られるもの」と書いていらっしやる⁽¹²⁾。金田一先生によれば、男女の言葉のちがいがある言語は、日本語以外にないわけではなく、あることはあるのだが、そのほとんどは「未開」と(金田一先生が)考える人々によって行われている言語であり、「文明」化された人々の言語にはあまり見当たらないということである。もちろん世界にはさまざまな言語が存在し、その中には、どういうわけか男女によって使い分けられている言語があったり、そうではない言語があったりする。それは事実であろう。しかし、その区別が「文明的」か「未開」によるという発想は、やはり言語学者のものとは言いがたい。

「三 外国語と日本語」では、系統の問題を取り扱い、日本語が「同系の言語をもたない言語と言われると、鷹にでも包んで市場に捨てられた孤児のような気がして、肩身の狭い思いがする。ことに同じような系統不明といわれる言語が、いずれもあまりぱっとしたものではなく、アンダマン語などは、同島に住む原住民の言語で、かつて民族心

理学者のヴントによって、地上でもっとも未開の言語という折紙を付けられた言語である。そういう言語と等しなみに扱われては、ますますいい気分ではない。」と書いていらっしゃる⁽¹³⁾。まず、系統が不明であるというのは、ある、インド=ヨーロッパ語族やアフロ=アジア語族のような諸言語において成功した言語学的方法では証明ができないということであって、その方法で不明だから、孤児のような言語だと決め付けるのは早計であろう。また、仮にどんな方法によっても系統が証明できないということがあっても、それは日本語なり比較する相手の言語なりの古い材料が乏しくて、そもそも比較研究自体がなりたないということもあり得る。また、そもそも言語のなかに「地上でもっとも未開な言語」という存在を示す指標そのものがあり得るのであるか。つまり、ある言語の系統が不明であるということと、その言語が未開であるかどうかは関係がないことであり、さらに、ある言語が他の言語よりも未開であるなどという考え方そのものに問題がある。

Ⅲ 語彙から見た日本語

金田一先生は、「一 語彙の数と体系」の中で、「注意すべきは、語彙の豊富なのは、文明国の言語よりも、後進民族の言語の性格だといわれていることである。」と書いていらっしゃる⁽¹⁴⁾。さらにイエスベルセンを引用して、「未開人の言語の特色は、以上あげた総括的な意味の単語がないことのほかに、抽象的な意味の単語が少ない」という指摘を紹介していらっしゃる⁽¹⁵⁾。これが正しいとすれば、内臓の各臓器について名称を持っている中国語のほうが、たった一つ、「腑」しかない日本語よりも、未開だということになる。また、稲・米・ご飯を「rice」一語で表す英語のほうが文明的ということになる。これはおかしくないか。つまり、言語で世界をどう認識・把握しているかということと、その言語が未開かそうでないかという議論をしている

わけで、そんな議論は最初から成り立たない。

3.2 『日本語新版 下』

V 文法から見た日本語 (一)

金田一先生は、「二 名詞の性と部類別」の中で、日本語の名詞には「性の区別がない」⁽¹⁶⁾が、「世界の言語のなかにはこういう区別を持った言語はかなりたくさんあるらしい。」と述べていらっしゃるが、どうも金田一先生はこの名詞に見られる種類分けをセックスの違い (Sex difference) と勘違いされているようだ。つまり、男性名詞は動物でいう「オス」と関係があり、女性名詞は「メス」と関係があるというようなことを考えていらっしゃるのではないかということである。結論から言うと、名詞の性は動物学でいう「性別」とは一切関係がない。ここでいう「ジェンダー」というのは、ある言語の語彙、例えば名詞なら名詞を集めたら、たまたま「-a」で終わる名詞と「-o」で終わる名詞に分けられたと。そこで、その「-a」で終わる名詞群を「女性名詞」、「-o」で終わる名詞群を「男性名詞」と呼んだというようなことにすぎない。そして、ある言語では三つのグループに分けられたときに、その三つ目を「オネエ名詞」とか「オカマ名詞」と呼んでもいいのだが、まあしかたがないので一般に「中性名詞」と呼んでいるわけである。この分類が10とか20とかあるのが、「思い出し部」として先生があげていらっしゃる現象である。「ここではすべての名詞が、人に関するもの、木などに関するもの、道具に関するもの……などの部類に分かれ、それぞれに形容詞でも動詞でもすべてちがった形をとる。(中略)つまり「人が、われわれの人だぞ、すてきな人だぞ、やって来たぞ、それは人がだぞ……」というように言うのだそうだ。そうして、もしこの「人」の部分が、「少女」となれば、(中略)「少女が、われわれの少女だぞ、すてきな少女だぞ……」というようになるというからめんどうだ。」と説明していらっしゃる⁽¹⁷⁾。そしてイエスベル

センがこのような「思い出し部」がある言語は「あまり進化していない言語である徴証ときめつけた。」ことを紹介していらっしやる⁽¹⁸⁾。

ドイツ語で太陽について語るときには、ドイツ語の太陽は「女性名詞」なので、それを「思い出す」ために、「太陽だぞ、女の太陽だぞ、われわれの女の太陽だぞ、すてきな女の太陽だぞ……」と言わなければならない、フランス語で太陽について語るときには、フランス語の太陽は「男性名詞」なので、それを思い出すために、「太陽だぞ、男の太陽だぞ、われわれの男の太陽だぞ、すてきな男の太陽だぞ・・」と言わなければならないことを金田一先生には思い出していただきたい。それどころか、たとえば英語で車について語るときには、「車だぞ、一台じゃないぞ、一台で走っているんじゃないぞ……」といちいち単数が複数かを明示しなければならないことになっているのだが、そういうドイツ語やフランス語や英語に見られる現象は「あまり進化していない言語である徴証」というわけではなくて、アフリカの言語に見られると「あまり進化していない言語である徴証」というのは、結局自分がどういう偏見にとらわれているのかを明示するという結果にしかなっていない。

英語の数については、私がここで指摘したことを「英語などはこの点やっかいで、その人、事物が複数だったら、かならず複数形を使わなければいけない。」と⁽¹⁹⁾お書きになり、また、日本語など東アジアの言語で、名詞をいくつかのグループに分けるということでは、先生が「助数辞」としてとりあげていらっしやる現象⁽²⁰⁾が、まさしくヨーロッパの多くの言語に見られる名詞の性の区別と同じ性質のものであることに、先生は気がついていらっしやらないのであろう。

レヴィ・ブリュルは、「劣等社会」⁽²¹⁾の「土人」⁽²²⁾や「原始人の言語」⁽²³⁾に見られる二数や三数や四数といった現象に言及して、「これらの言語は我々のものと同じく、数の範疇を知っているのであるが、しかし同じようには表わしていない。我々は単数と複数を対立させる。(中

略) この心的習慣は抽象の日常的な迅速な使用を、換言すれば論理的思考とその材料との使用を含んでいる。」⁽²⁴⁾として、19世紀的な白人(言語)優位主義を反映しつつ、自言語中心主義をモロ出しにして、非言語学的認識を展開している。彼は、単数と複数を区別するヨーロッパの諸言語のほうが、二数や三数や四数といった数の範疇を持つ諸言語よりも論理的であるといっているのである。その彼にして、性についてはポーウェルを引用して、「[研究者(言語学の)は、]とポーウェルは云っている、「言語の性別は、単なる男女性の区別に過ぎぬものであるとの観念を全く頭から払い除ける必要がある。」北アメリカ人の言語では(また、バントゥ語、インド・ヨーロッパの諸言語に於いても多分)、「性別は言語学上の分類法である。」と正しく指摘している⁽²⁵⁾のに、である。

3.3 日本人論への言及

金田一先生の日本語に関する言説には、ここで指摘したような偏見も見て取れるのだが、日本人論にも通じる、味わい深い記述も多い。

以下にその日本人論の部分を「Ⅶ 日本人の言語表現」から少し引用しておこう。

「日本人の間には、そもそも物は言わない方がいいという気持ちがあるらしい。」⁽²⁶⁾

「自分の手柄は極力隠そうとする。自分の落度ははっきり認めようとする。日本人の心遣いがこういう表現に出ていると思う。」⁽²⁷⁾

「日本人は話す時は、絶えず相手の気持ちを考慮する。相手によい感じをもたせようとする。ただし、日本人はそのためにお世辞を使うことはよいことと思っではない。日本人が重んじるのは、感謝と陳謝である。」⁽²⁸⁾

さらに「日本人のたえず相手のことを考慮しながら話す態度、ことに、あやまることをよしとする態度はまことに好もしいが、外国人に

は通用しないから注意しなければいけない。」⁽²⁹⁾ という注意も忘れて
いらっしやらない。そういう意味ではまことに好著ではある。

4 まとめに代えて

ここでは主に金田一先生のご著書に見られる偏見を扱ったが、こ
から得られる教訓は小さくない。たとえば、偏見はないほうが望まし
いとは言えるけれども、あってもそれほど望ましくないとは言えない
こと。偏見があると学問的業績があげられないかと言うと、そんなこ
とはない。それは本稿で指摘したように、金田一先生に偏見がなかっ
たわけではないが、だからといって、それが先生のご業績にマイナス
の影響を与えているとは考えにくい。もし偏見があっても、先生のよ
うに高名な学者になれるのである。

筆者の専門分野のひとつの「日本語教育」においても、かなりひど
い偏見の持ち主がいる。アジアやヨーロッパの言語はまだまともな言
語だから、その母語話者は努力すれば日本語を身につけることができ
るが、たとえばアフリカのような地域に住んでいる、「未開」の言語
を話している人々は、日本語を身につけるうえでハンディーがある
というのだ。そういう偏見を持った日本語教師は、言語学や文化人類学
の基礎となる「言語相対主義」や「文化相対主義」といった発想自体
に欠けている「野蛮な」人種であるというしかない。それでも彼らは
日本という土壌においては当たり前な普通のインテリと見なされてい
るようだ。筆者に言わせると、そういう人種は、教育者や研究者、と
いうよりヒトとしての資格に欠けていると言わざるをえない。しかし
ながら、そんな「人非人」でも、専門分野の論文を業績として認めら
れ、(旧) 国立大学の教授という肩書きを得ている。そんな現象が日
常なのがこの日本の現状なのである。

また、明らかな「嘘」を標榜して、自らのイデオロギーあるいは理

想の実現を目指して、万人を欺くことをこそ自分の天分と信じ、教授という肩書を利用している輩も掃いて捨てるほど存在する。

そういうどうしようもない存在と比較すると、「言語学」的な相対主義を身につけていないがための偏見の発露などは、些細な問題であり、かわいいものである。

注

- 1 金田一(2003～)
- 2 金田一(1988)上・下
- 3 金田一(1988)上 p.3
- 4 角田説については、江村(2007)・江村(2008)等を参照。
- 5 金田一(1988)上 p.2
- 6 Ibid.p.15
- 7 Ibid.p.14
- 8 Ibid.p.15
- 9 Ibid.p.23
- 10 Ibid.pp.24-25
- 11 Ibid.p.36
- 12 Ibid.p.37
- 13 Ibid.p.58
- 14 Ibid.p.140
- 15 Ibid.p.142
- 16 金田一(1988)下 p.56
- 17 Ibid.p.67
- 18 Ibid.p.67
- 19 Ibid.p.69
- 20 Ibid.p.76
- 21 レヴィ・ブリユル p.173 他
- 22 Ibid. p.174 他
- 23 Ibid. p.181 他
- 24 Ibid. pp.175-176
- 25 Ibid. p.188
- 26 金田一(1988)下 p.267
- 27 Ibid.p.277
- 28 Ibid.p.282
- 29 Ibid.p.293

文 献

- 江村裕文(2007)「サビア=ウォーフの仮説について -文化その3-」『異文化
論文編』第八号 法政大学国際文化学部 pp.25-53
- 江村裕文(2008)「サビア=ウォーフの仮説について 補説」『異文化 論文編』
第九号 法政大学国際文化学部 pp.25-29
- 金田一春彦(1988)上『日本語新版 上』岩波新書
- 金田一春彦(1988)下『日本語新版 下』岩波新書
- 金田一春彦(2003～)『金田一春彦著作集』12巻+別巻 玉川大学出版部
- レヴィ・ブリュル(1910)『未開社会の思惟』山田吉彦訳(1953)岩波文庫